

課題 1：震災復興住宅の検証

—木造仮設住宅は高かったのか？—

東日本大震災後、最も急がれたのは仮設住宅である。仮設住宅用の杭は、過去の経験に基づき迅速な供給体制が構築され、国有林民有林を問わず加工工場へ届けられた。その後、合板工場の津波による被害から合板が無く迅速に建てられないといわれたが、全国他地域の合板工場フル稼働で供給された。

仮設住宅は、災害時にはプレハブ団体が供給することとなっていたが、実際にはストックが無く、急遽生産が行われ時間をかけて建設された。

当初は、木造の仮設住宅は構想に無かったが、地元の木材で地元の大工・工務店で建てようと動きが盛り上がり、岩手、福島を中心に構想が実現した。当初の単価比較では、プレハブの270万円／戸、木造350万円／戸だったが、東北の気候条件は厳しく、結露・断熱対策が求められ追加工事がなされたのは報道のとおりである。結局はどうなったのか。木造の方が安くつくこととなった。その他のメリット、デメリットは別表のとおりである。単なる地域の条件を見ない見積もりは役に立たない。もっと大きいのは、住みごこちという金額では表せない価値をどう見るかである。こうした結果から、各県単位で木造仮設住宅建築の協定を結ぶという動きが加速している。是非全国での対応を促進したい。当局内の栄村も東日本大震災の翌日、大地震により被害を受けたが、仮設はプレハブだったが、東北と同様に平屋根で雪降ろしが大変とか、断熱材の問題とか北国ならではの問題が生じた。栄村の復興住宅は、地元材を使って木造住宅が建てられ、まとめて団地を建築せず、集落単位に建てられ地域住民がコミュニティーに復帰したのは今後の優良事例に値すると思われる。今後被災地の復興公営住宅の建築に活かすべきであろう。

類似の事例として、新築住宅のチラシは、〇〇〇万円で建てられるというが、（でも必ず、標準工事費とか外構を除くとか小さく書かれている。）実際には違うというケースと同じかな～。

東日本大震災仮設住宅の結果 (プレハブと木造)

木造仮設住宅

当初から床・天井・壁に断熱材、二重サッシを施し、夏の暑さ、冬の寒さ対策を回避。
また、木材の吸湿性から結露しない。

プレハブ仮設住宅

断熱材がなく、結露がひどい。二重サッシ、断熱材を入れる追加工事が必要。



	木 造	プレハブ
当初工事費	370万円	240万円
結 果	550万円	744万円

その他の違い

注：南三陸町事例

職 人	地 元	他地域から
材 料	地 元	他県から
間取り	1K(2名)～3K(6名) (設計に自由度)	規格品のみ
工 夫	雨樋設置し雨水処理	な し
	屋根を片流れとし、91cm軒出しし、雨と直射日光対策	
	壁に物を掛けられるよう板張り	
解体後	主要部材は再利用	再利用できない

結果、プレハブの仮設居住者からこのような違いに苦情あり